

小川哲生教授のご定年によせて

— 思い出の記 —

青木 秀雄

小川哲生先生は、早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士・博士課程在学時代の恩師、故児玉三夫先生（当時明星大学副学長）の要請に応え本学に奉職以来、誠心誠意児玉先生の厚い信頼と期待に応え、通信教育部、大学出版部、教育学部、大学全体及び学校法人明星学苑等の経営の要職にあつて終始ご尽力され、今日の明星大学及び明星学苑の礎を築いてこられた。特に、学長として指揮をとられた教育学部を初めとする改組改編は、大学全体の隆盛に大きく寄与したことは周知のことである。ますます学内外におけるご活躍が期待される先生のご定年は誠に残念ではあるが、この時機に、長年にわたるご貢献に対し衷心より敬意を表するとともに、ご指導とご厚誼に深い感謝を込め、その功績の一端につきエピソードを交えご紹介することで饒別の言葉とさせていただきます。

記憶に残る先生との出会いは忘れ難い。児玉先生のお誕生日であった1975年8月1日に、当時の通信教育部棟（12号館）2階で開催された還暦祝賀会であった。小川先生はその前年、本学創立10周年の準備が忙しくなる3月、通信教育部にご就任された。筆者は当時より学長秘書室勤務であったこともあり、有志と共に祝賀会を準備した。その際、小川先生にフルート演奏のご協力をいただいた。

後年、先生のお部屋に何うと、よくクラシック音楽のスコアを読んで楽しんでおられた。通信教育部主任までの時期は、昼休みに毎日のように通信教育部職員と野球（剛腕投手）をしていた。しかしその後、学長等の管理職に就任されるや、矢継ぎ早に様々な課題を克服するとともに、新たな目標に向けて挑戦し次々に達成された。重責に耐えるストレス解消法として、音楽で気分転換を図っておられたのではないかと思う。

先生は大変頭の回転が速く、抜群の管理能力をもっておられる。また、口とは裏腹に、職員の面倒見が実によく、大変慕われてきた。これは特に、通信教育部時代の仕事を通じ、恩師児玉先生を見習った賜物ではないかと考える。通信教育部は大学の一部ではあるが、大学運営機能のほとんど全てを備えており、さらに様々な学歴とキャリアをもつ社会人入学生が押し寄せることから、教育法規に習熟するとともに、かつてはしばしば旧文部省と渡り合わねばならなかった。本学通信教育部の隆盛は、小川先生のこのような力と情熱に負うところ大であらう。

先生が通信教育部におられたころ、よく児玉先生の面倒をみていただき、学長秘書室として随分助かった。たとえば、児玉先生は海外視察を大変好まれ、多忙な毎日を押して海外出張された。小川先生のご尽力で、創立20周年（1984年）を期してミシシッピ州立大学（MSU）と姉妹校協定を締結することとなり、その前年に同大学を随行訪問された。

その際、ミシシッピー川に浮かぶクルーザー（大型ヨット）による教育効果（「体験教育」の実践）に甚く感動されたという。帰国されて後問もなく、縁あって作曲家いずみたく氏が来学され、自ら建造した「フォンテーヌⅡ世号」を託したい旨申し出があった。それは「いずみ」をもじった命名なので、「こだま」ではなく「エコー号」とし、早速本学の一般教育体育に「自然コース（ヨット）」として上野直紀教授ご指導のもと、14年間にわたり毎年70名近い学生（計868名）が受講し、明星建学の精神体得の要の一つとなった。やがて小川先生が学長になられ、私学の存在意義である建学の精神具現化が鋭意推進された。「体験教育」の目玉として「自立と体験1」が、多くの反対（筆者も教授会で反対演説により先生を激昂させた）を押し切り、全学共通科目の必修となった。今日、他大学から大いに注目されるこの科目設置を実現させたご慧眼に敬服するしかない。

また毎年、兄玉先生の夏期スクーリング科目「教育学演習」等のお手伝いをよくされた。兄玉先生は常に大変お忙しく、資料の整理等の時間がないにも関わらず、責任感が強くてきっちりした授業内容に心掛けたい一心でしばしばイライラされていた。そのようなときにも、相手の心境を素早く察知し、小まめに対応してくれる先生に対し信頼が厚かった。スクーリング期間中に、兄玉先生が大好きなそうめんを毎日のように学長秘書室でゆでて供した。一緒に美味しく食べた光景を、今でもそうめんを食べる度に思い出す。小川先生でなければ、あのように要領よく対応できない。本当に助けられた。

先生がご関心をもって取り組んだ研究の成果は、J. デューイの教育論、通信教育と生涯学習論、大学経営論の3領域にまたがる。その研究方針は、近年研究者として目標とすべきあり方、すなわち研究活動とその実践との融合であったといえよう。その足跡をたどるため、主な研究論文・著書について次に記す。

まず、修士論文『J. デューイの芸術・教育論に関する研究』は、その教育論を芸術論の観点から研究したものである。その後、「芸術と有用性」(昭和54年、日本デューイ学会研究紀要第20号)等でJ. デューイの芸術・教育論を通して、「美」の有用性について論じた。また、兄玉先生の喜寿を記念して編まれた『教育の真理と探求』(平成5年3月、明星大学出版部)の「J. デューイの教育目的論が生涯教育の目的論形成に与える示唆について」において、J. デューイの教育論が生涯教育、特にその目的論形成に資するであろうと思われる自己実現論及び社会的自己実現論について論じて以降、「J. デューイと生涯教育論—成長論及び自己実現論の視点から」(平成5年9月、日本デューイ学会研究紀要35号)から平成14年に至る諸論文において、その成長論及び自己実現論に焦点をあて、生涯教育論との関わりにおいて探究された。これらは先生の教育論の骨格を形成したご研究であったといっても過言ではないであろう。

次いで、通信教育と生涯学習論に関しては、*Japanese University Correspondence Education—History, The Current State, Problem Today* (昭和63年3月、明星大学教育学研究紀要第3号)において、日本の大学通信教育について概観してその問題点を指摘し、「生涯学習社会の大学通信教育」(平成1年12月、第37回日本通信教育学会『研究協議会紀要』)において、生涯学習社会の到来に応じた大学通信教育の役割について論じるとともに、「英国オープン・ユニバーシティの通信制大学院教育について」(平成8年3月、明星大学教育学研究紀要第11号)ではその自学自習システムについて考察した。

また、「J. デューイは今日の生涯学習社会をどう見るだろうか—法と行政の基本的課題」

(平成14年10月、日本デューイ学会第46回研究大会「課題研究：デューイと生涯学習論」第1提案者として発表した論文は、生涯教育論の視点を分類し、併せて日本の中央教育審議会等の答申及び関係法令の制定の内容を分析した上で、デューイ教育思想の①民主主義の基準②二元的世界の克服点の各視点から、今日の日本の法令と行政の基本的課題について検討し、『社会教育の現代的課題』共著(平成15年、明星大学出版部)の「第1章 生涯学習社会における現代的課題」では、生涯学習に関する理論の形成過程及びそれに対応した日本の生涯学習に関する政策、法令、各種審議会答申等に基づき、社会教育行政の課題について論じた。これらの研究は、J.デューイの教育研究と生涯学習論とを繋ぎ、さらに次の大学経営論とを結びつけるものであった。「大学審議会大学教育部会に於ける審議の概要について」(平成2年11月、日本通信教育学会研究協議会紀要第38号)において、大学設置基準の大綱化による大学開放の可能性を検討し、また *The University Reform of Today: Analysis of management and System reform of the university* (平成16年10月, Academic Events for the 50th Anniversary of Shanghai Normal University International Forum for University President の際発表した論文) は、大学改革に直面する日本の大学の現状とそれに関する具体的事例についての調査研究である。

「大学通信教育に於ける自己点検・評価について」(平成5年11月、日本通信教育学会研究協議会紀要第41号)では、大学通信教育における自己点検、自己評価のあり方について具体的事例をもとに考察し、「米国MSU継続教育部の点検・評価について(Ⅲ)」(平成14年3月、明星教育学研究紀要第17号)は、米国ミシシッピ州立大学継続教育部が行った点検・評価についての調査研究の第3部であって、MSUCEの点検・評価レポートと聞き取り調査をまとめ、日本の点検・評価の今後の課題について検討している。

先生のご研究は、J.デューイの教育論から通信教育と生涯学習論へ、さらに大学経営論へと発展していったことが窺える。先に触れたように、これらは大学管理部門の責任者として、通信教育部の経営と大学経営に参画した実践的研究活動と連動しながら生み出されたものといえよう。かくして、通信教育部、教育学部、大学全体、さらには学校法人明星学苑に対する卓越した管理運営、及び教育研究の実践躬行がここに成し遂げられた。

余談になるが、明星大学に勤められてから10年ほど、大変失礼なことに、筆者は先生を呼び捨てにしていたらしい。ある日先生は、一つ年下であることに気づかれて憤慨した、とご本人から最近聞かされた。正直いって、全く記憶にない。だが、先輩後輩の関係は、歳が近ければ近いほど確かに気にかかるものだ。スポーツや音楽、仕事にと、颯爽と向き合うお姿が若く映っていたのではないかと思う。長い間先輩を呼び捨てにしていたこと、この場をかりて平に謝りたい。

先生との思い出は、どうしても児玉先生に絡んでしまう。筆者もよく海外出張のお供をさせていただいたが、それ以上に先生との随行を好まれた。お二人とも大変仲良く出発したと思うと、険悪な状況で帰国されたことが暫しあった。ときに喧嘩をしては仲直りする、親子のような師弟関係であった。いざとなると、常に小川先生を頼りにした。児玉先生を直接知る教職員がほとんどいなくなった現在、このような話をしてもピンとこない方がほとんどであろう。話は尽きないが、紙幅の都合上、先生の今後のさらなるご活躍を期待し、ご健勝を心より祈りつつ筆をおくことにしたい。